

WVE シリーズ講座 第 1 回 レポート

日時 2019 年 11 月 19 日 (火) 17:00-20:00 会場 KRP9 号館 5 階 Canopy 参加 37 人 (関係者含む)

第1部 「大学発ベンチャー上場までの軌跡／奇跡」 (株) キャンパス 代表取締役社長 河邊 拓己氏

・非小細胞肺癌に対する抗がん剤の有効性は「よくわからない」とされていた 2000 年に 3 人で起業。未知の巨大な敵を 3 人でやっつけるゴーストバスターズに倣い Cancer Busters になろう、真っ白なキャンパスに絵を描くように抗がん剤を創ろう、と命名。従業員は現在 13 人。臨床畑と基礎研究畑のバランスが良く、臨床試験の経過を理論検証し、現場に戻す (Bed & Bench) サイクルがうまく回っている。

・主力製品は、免疫制御に関わるたんぱく質カルモジュリンに作用するペプチド。米国での臨床試験で悪性胸膜中皮腫への治療効果が確認できたが、ターゲットの非小細胞肺癌で失敗した。危機的状況に陥ったが、免疫療法の効果を高めるとわかり復活。さらに、パイプラインも複数みえている。基礎研究から臨床試験までトータルで担えるのが当社の特徴である。

・ Kaplan-Meier 曲線における生存率 50% の期間 (x 値) を「余命」と言う。余命を延ばすことが、抗がん剤臨床試験の目標だったが、治せる可能性のある薬が出来てきて生存率 (曲線が寝るときの y 値) を上げることに変わるというパラダイムシフトが起きた。余命をみる場合、統計有意差の出る 600-1,000 症例が必要だが、治るに近い患者さんの数なら数 100 症例程度で済む。これこそ、原理が発見されてから 200 年かかって免疫療法が世に出たベースであり、このおかげで当社も息を吹き返した。

・動物実験までは数百万円でも済むが、前臨床で 2 億円、臨床になると数十億円と、創薬ベンチャーは多額の資金が必要なので、初めから米国で資金調達しようと考えた。国内特許ではなく国際特許で通用するか米国の特許事務所による査定次第で投資すると VC に言われた。米国では、科学技術顧問にどのような人材がいるかが重要。様々な縁で著名な医師・研究者たちが格安で当社に参画し、非常に前向きで具体的なアドバイスをくれている。

・前例尊重型の日本とは逆に、規制当局である FDA ですら「前例は無い」と伝え「試す価値がある」と言う。臨床試験の許認可に限らず、法に書かれていることを認める日本と法の禁止事項に抵触しなければ通す米国とではチャレンジする環境がかなり異なる。

Q) 何を大事にしているの？

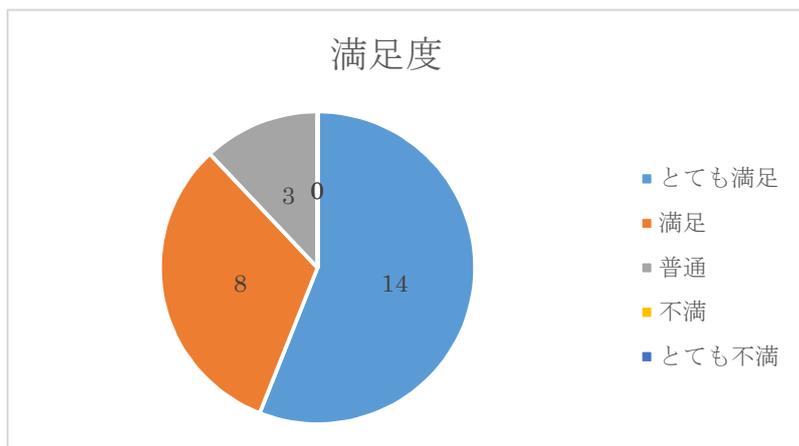
A) 科学的か？倫理的か？経済的か？の優先順位で、かつ、最短の時間で目的を達成すること。

Q) 報酬の設定は？上場で変化した？

A) 薬が世に出るまで売上は立たないので資本が底をつくまでにあらかじめ設定したマイルストーンを達成して次の調達をして進めてきた。社員には同業他社を見て遜色のない給与を設定しているが、自分は大株主ではないし報酬も多くはない。がんを治すのが当社の目的である。

【受講者感想】

リアルな壁や解決策を知れた。／パラダイムシフトからの新しい価値の創造と苦労話はすごく楽しかった。／事業を立ち上げる Point がすごくわかりやすかった。／上場の方法は研究開発と同じという言葉が響いた。／創薬ベンチャーの IPO の意義が理解できた。大変さや必要資金のイメージができた。／チームビルディングの内容と目的、目標が聞けて非常に良かった。



第2部 「デザインシンキング～Rapid Prototyping」 京都造形芸術大学芸術学部 准教授 川向 正明氏

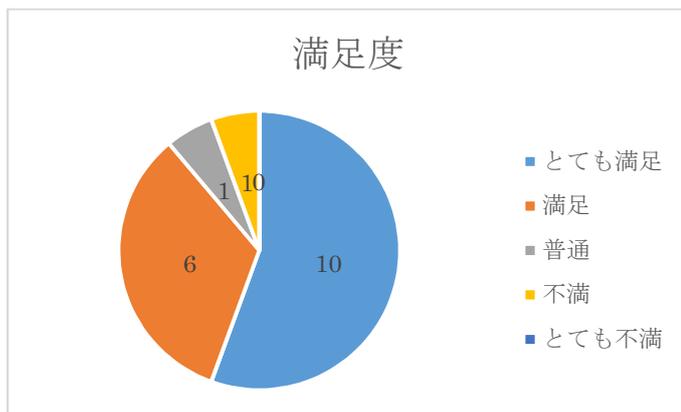
- ・講師の自己紹介に続き、各グループにて自己紹介しあうアイスブレイク。
- ・Google Glass は、45 分で（プロジェクトへの参画）希望者募集からプロトタイプまでが出来た。その手法をトレースした。
- ・アイスブレイクののち、班ごとに異なる課題が配布され、プレスト-試作-テストマーケティング（説明しなくても他の班の人にその使い方をわかってもらえるか）を 2 クール実施。

【河邊先生ご講評】

資金調達も研究も同じで時間を区切り、その間、頭をフル回転させ考えることが大切。／このようなワークを繰り返すことで物凄い製品やサービスが生まれるのだろうという勢いを感じた。／刺激的で活気のあるワークショップで、私のイメージの中にある悪い意味の日本的でなく、良い意味の米国的で素敵だと思いました。

【参加者感想】

メンバー次第で得られる価値が全然異なるのでグループ編成は重要だ。／グループワークが盛り上がるには課題に対する共感もポイントだ。／「説明要らずで使える」デザインは、研究の現場・業務（システム操作）など様々な場で活用できそう。／考える基礎を学べた。／久しぶりにスピード感を楽しめた。／みなさんのアイデア力が勉強になった。／意見の少しのズレを調整する苦勞を再認識した。／意外にちゃんとした試作ができて驚いた。／多様な視点でアイデアを話し合えた。インテンシブで大変勉強になった。



【受講者属性】

